たより

『美紗の会』ニュース

第47号

平成十六年四月二十三日

発行者
「美紗の会」
☎03-3441-2726
編集責任者
大久保　朋　子

美紗の会を終えて

西松布咏

三月十四日第二十七回美紗の会おひきぞめは、初めての名取り式からちょうどひと月たった明るい日差しに包まれた日曜日でした。

今回は名取り披露の会でもあり、いつになく師弟ともども緊張の面持ち。

青山荘【あじさいの間】に入るとすでに金屏風に緋毛氈の舞台のしつらいで華やいだ雰囲気の中「白扇」で開幕。

前半は、出来るだけ会主は後に引っ込み、会員でコンビを組んでの演奏。

出演者の背中を見ながら、はらはらするのも楽ではないのですが、加藤さんの暖かい司会で失敗は成功の元！と励まされて和やかに進んでゆきました。

本番組は入門してまだ二ヶ月足らずの木村さんから。インターネットでCD注文のやりとりからいつしかトップバッターで、「初めより」「芝で生まれて」を唄うはめに。でも声楽でならした美声に客席はただただ吃驚！

続いてやはり入門したての河内さん。歌舞伎役者だったので度胸は満点！と思いきやご本人は「がたがた震え自分の声が聞こえませんでした。」と反省しきり。でもめりやすの「宵は待ち」は雰囲気たっぷりでした。

京舞をなさっている森田さん。芸の厳しさは百も承知だけに「人前ではとてもとても…」と謙遜し、出演を遠慮していましたがついに「青柳」を。なかなかの唄声を今は亡き歌沢の家元であられたご主人にお聞かせしたかった！

今や三味線のとりこになり、視力のハンディをものともせずに暗譜して稽古に臨む武士道精神の細岡さん。「槍はさびても名はさびぬ…」と「槍さび」を堂々たる唄いっぷり。

すでに美紗の会のアイドル池水さん。客席でお母様と妹さんが応援して下さり「梅にも春」を可愛らしい声で唄いヤンヤの拍手！

昼は白衣に聴診器を夜は撥に持ち換え三味線の稽古に余念のない稲生さん。唄も「好いた同士の差し向かい…」と江戸情緒たっぷりに「初雪」を。

美紗の会の熊さんこと川崎さん。巨漢ながら何でも「よござんす！」と気軽に引き受けてくれる頼りになるお人柄。いなせな鳶のオア兄さん「初出見よとて」を地で唄いました。

渋い着物も板につき、ひたすら精進の山中さん。「師匠が難しい曲を選ぶから…」とぼやきながらも「紀伊の国」をきっちり唄いました。

六十の手習いで三味線を始めた百瀬さん。なかなかチントンシャンが出ず首を捻ることしきりですが、唄はすでにお手の物とばかりに「小春」と「夜桜」を。

目下多忙な山本さんですが、たまに渋いのどをお座敷で披露しているとかで、すっかり唄いっぷりに味が出て、義太夫調の「三十三間堂」そして小粋な「河童」を。

番組が順調に進みそろそろ三時になりお待ちかねの休憩タイム。冷えたビールや茶碗酒で喉をうるおし、まるで花見の宴のような賑わいでした。

そして新名取り紹介の時間がやってまいりました。

舞台に新名取りの四人（小高こと忠咏さんは都合で欠席）が並び、会主が順番に紹介した後、会長が「堅苦しいと思われがちな古典を自由な雰囲気で楽しく習ってゆこうという美紗の会も序々に円熟してゆき、無理のない形で名取りを出すまでに至りました。これはまさにルネッサンスというに相応しい、誠に喜ばしいことです。」と心のこもったご挨拶に今後もますます一同精進せねば…と胸が熱くなる思いでした。

後半のトップバッターはニューヨークから三ヶ月ぶりに帰国した傅田さん。「すっかり遠ざかってしまったから…」と稽古不足を気にしていましたが、持ち前のパワーで「花は上野」を元気良く唄ってくれました。

白衣の天使の山根さんがいつの間にか近藤夫人になり、幸せ一杯の声で「柳橋から」そして芸者の恋を唄った「夢の柳橋」を。

名取り式で後見人になって下さった花柳千寿文師こと飛田さん。

情緒のあるさすがの節回しで明治一代女の花井お梅を唄った「青柳の糸」を。あでやかな着物姿と明るいお人柄で会を彩って下さる鈴木さん。ますます艶が出てきた声で「いつしかに」と「春雨」でヤンヤの拍手。

美紗の会名物の長唄はお目出度いご祝儀の曲「梅の栄」を。

新名取のメンバーにベテラン佐久間さんが加わって、にぎやかにのどかな初春気分を会場いっぱいにひろげてくれました。

会長になられて一段と邦楽の雰囲気が出てきたと評判の本郷さん。

芝居でよく演じられる「小猿七之助」の濡れ場を描写した草紙庵の名曲「浦漕ぐ船」と助六の郭通いの「春霞」を傳田さんの連弾きで。

年に一度の着物も板についてお似合いの佐久間さん。富本節の七つ揺りの節回しに苦労しましたが、「豊後節浮名読売」を堂々と唄いました。

美紗の会を応援して下さり、必ず賛助出演して下さる竹澤さん。春日の名取であられ「春の夕べ」「梅一輪」の古曲を春めいてうきうきとした様を情緒たっぷりと唄って下さいました。

続いてのご出演は千駄木の名物三弦師の菊音さん。

富本の「田面雁」の一節の「待ちわびて」と、いかにも江戸小唄の「うからうから」を乙なのどで。

そしていよいよ照沼こと佳咏さんが新名取りのトップバッターでご登場。

一咏さんの上調子が入り江戸下町の風情を新内調で綴った「中州の思い出」をきりっとした色気で。エスプリの効いた「この先」をさらりと唄い分けました。

美紗の会きっての美声の持ち主、川邊こと紀咏さん。

民謡山中節が入る節回しの難しい唄をていねいに唄い、お得意の新内小唄「蘭蝶」を哀切の語り口でたっぷり唄いました。

いつも飄々とした風情で会場を沸かせている岡崎こと一咏さん。

唄より三味線が得意なので、弾き語りで「文弥くづし」をと張り切ったのですが、前夜のお酒がまだ災いして「一杯飲め飲めトロンケン…」を地でいってしまいました。

どっと笑いを取った後は、大久保こと朋咏さんが「今朝の雨」をしっとりと唄い、遊女の悲しさをにじませて客席をしーんとさせました。

いよいよ最後の演目は会主の弾き語りで花柳千寿文師の上方唄「六歌仙」。裾に艶やかに六歌仙をあしらった薄ねずみ色の着物で文屋康秀、大伴黒主、喜撰法師、在原業平、鳥羽僧正、そして紅一点小野小町をめぐる様をそれぞれに踊りわけられました。

格調の高さをほどいたユーモアの感じられる名人芸に、ただただうっとりの至福のひとときでした。

かくして、春の良き日は和気藹々のなかに芸を楽しむ方々が一つになり、日頃の精進をつつがなく発表できました。

そして「名取りの方々が一段と御上達…」のお褒めの言葉も頂けて今回の美紗の会がまさにルネッサンスの幕開けとなりまして嬉しゅうございました。

どうぞ今後ともよろしくお付き合い下さいます様お願い申しあげます。

水上能舞台「伝統館」の思い出

西松布咏

昨年九月二十七日『源氏物語あさきゆめみしえひもせす』の公演に参加の為新幹線で山形駅に降り早速森先生の車で東北芸術工科大学へ向かった。

街を過ぎ田畑を過ぎまっすぐに山の懐へと向かう車中ですでに日常ちぢこまっている細胞が膨らんでゆく心地よさを感じ山の麓に広がるキャンパスに着いたとき十二年前に訪れたコネティカット州のアムハースト大学での公演を思い出した。

北米のボストンから車で四時間程のコネティカット渓谷を望む広大な丘陵地帯にある大学のホールで『伝統から未来へ』を開催した時のことを。

当時日本文学教授だったジョンソルト氏の強い要望で古典や現代の区別を取り払った自由な発想で日本の芸能を展開して欲しいとのプログラムだった。

同行者は舞踏家、詩人、そして三味線奏者の私。今までこのような構成をしたことがなかったので戸惑ったが考えてみると芸能の源は一つなのだ。人類の営みから生まれた音楽、踊り、それが土壌、歴史、時代、の変遷で様々に異なった表現方法になっていった。

それを知ることが異文化交流の面白さなのだ。

やはり今回の東北文化研究センターでの公演も最初は雲をつかむような想いで参加したが、今こうして記憶をたどりながら思い出してみるとアムハースト大学の民族音楽担当の教授が提案した『地球的規模で捉えた作曲法』の研究集会での一文がよみがえる。「世界の音楽の様々な要素（音階、旋律、構成法、表現形式、楽器、合奏法）などの探求と楽曲及び即興曲をアメリカとカリブのリズム、イスラム世界及びインドのメロディー体系、インドネシアのガメラン合奏法、中国、日本の伝統的音楽様式などをゲスト講演やフィルム、ヴィデオなどで研究してゆきたい」と。

今回の水上館での公演を提案なさった森先生もきっとこういった見地でのパフォーマンスを望んでいらしたのだろうと思い至った。

舞、琵琶、三味線で展開する「源氏物語あさきゆめみし…」のタイトルは一見脈絡のない曲目が選ばれている。

しかし琵琶は平安時代ごろに日本に伝来されており源氏物語絵巻にも描かれている。そして時代は貴族による雅のあはれの文化から武士の台頭によるあっぱれの文化。そして栄枯盛衰を語る平家琵琶へと移ってゆき、やがて室町時代になると琵琶に代わる楽器として三味線が伝来してくる。

元来、鉦や太鼓のリズムでの踊りが三味線の普及と共に瞬く間に踊りの伴奏は三味線が当たり前になってくる。まさしく地唄舞はその例である。

芸能はこうして世の移り変わりと共に変化してゆくのだ。

古澤侑峯さんは踊りをこうした流れの中で捉えている数少ない舞踏家だと思う。

まず、プログラムは伝統的な地唄舞『名護屋帯』から始まった。

元来、地唄舞はほのかなろうそくの明りを灯し狭い座敷で舞われた。

その狭い空間がやがては現実を忘れる果てない夢幻の世界にまで広がっていったのだ。

今回は山からの霊気を頂き開放された自然の中で男に去られた哀しみを「二重の帯が三重回る…」と静かに唄う地唄の抑えた表現がどう響いたであろうか。

次にジャンテイさんの琵琶による古曲『イ族舞曲』。

いつも思う事だが中国の楽器はやはり悠久の国らしく雄大な自然を背景とした明るさと軽やかなリズムが心地よい。

彼女の清楚な微笑みと共に繊細な絃が大草原の風を運んでくれた。

二部の創作の部で私は北園克衛の『ブルー』『黒い肖像』谷川俊太郎の『九月の唄』を三味線で歌った。三味線は日本の代表的な楽器であるだけに様々なジャンルに分かれていった。そのルーツをたどれば琉球の三線、中国の三弦そしてシルクロードを経てエジプトまで似たような楽器がたくさんありやはり世界に誇る民族楽器の一つなのだ。

日本で三味線が重要な位置をしめるようになったのは音が断続的なので声や歌の文句を邪魔しないで伴奏出来るからであると思う。

私は昔から、詩人の朗唱の時三味線をバックにジョイントしてきたが、言葉や感情をより引き出すために効果があるので、時折日本の伝統楽器としてではなく優れた楽器と位置づけて色々試みている。

古澤さんも、古典への造詣も深いが古くから源氏物語を様々な音と共に身体表現した創作舞踊を「源氏舞」として多くを手がけている。

今回も『葵上』を新しい能がかりの舞としてダイナミックなミュージックコンクレートをバックに女の怨念を水上の舞台に飛翔させた。

三弦と琵琶による即興演奏は心配であったが興味深かった。

ジャンテイさんとは前日が初対面、そして夕食後のわずかな打ち合わせだけでその場に臨んだ。日頃完璧なまでに完成した古曲を忠実に再現することに血眼になっている私にとって即興は解き放たれた未知との遭遇である。

琵琶と三弦の糸が風に心地よく溶け合って出羽三山のはるかかなたまで届くかのようで、まさに自然と音との融合であった。

そして最後の演目はジャンテイさんの琵琶と古澤さんの舞で『野宮』。

葵上を呪い殺してしまった執念の恐ろしさを自ら悟った御息所が源氏の君への思いを封印し、秋深く寂しい野宮へと下る場面。儚げな琵琶の音をたどりながら、最後まで気品を保ちながら哀しみを昇華してゆく舞が美しく、「あさきゆめみしえいもせす」の印象がいつまでも風に揺れていた。

半年前の公演を振り返るのは決して容易なことではなかったけれど、色々な情景が鮮やかに思い出されて懐かしかった。

千年も前に描かれた源氏物語が、近代建築の水上能舞台で再現されたのは芸術と工学の融合を目指し芸術の心を持った科学、科学の知をもった芸術をスローガンに掲げている大学だからこそ実現したのかもしれない。

その公演のために多くの学生の方々が裏方をして下さった。

私の創作曲のために前日道で逢った女子大生が北園のシュールな詩『今去ってゆく秋のブルーの風の中にいて…』と、詩の中のジャコメッテイの影像のようにまっすぐ立って朗唱してくれたことなどがよみがえってくる。

伝統とは前衛と呼ばれたものに時代が近づいた時の言葉なのだーと、かつて友人が語っていたけれど今回の公演は様々な異空間で世代、人種、ジャンルを超えて溶け合い又新たなる創造へのステップになる可能性を抱かせてくれた。

キャンパスの一角に創立を記念したポールビュリイ氏のモニュメント『泉フォンテイン』がある。まさしく『伝統館』は自然の懐に包まれて湧き出ずる創造の泉の場なのだ。

新しい時代をつくる若いエネルギーを溢れる水のごとく生み出して欲しいと時を経た今も願っています。

名取り式体験記

己紗佳詠

二月十五日。それは二月ながら、春のような暖かな日だった。布咏師匠や諸先輩の日頃の善行のおかげで、美紗の会初の記念すべき「名取り式」は、お天気にも恵まれ、厳かな中にも楽しくとり行われた。

この日を迎えるにあたっては、師匠はもちろんのこと、たくさんの皆様のお力添えがあった。とりわけ後見人をお引き受けいただいた花柳千寿文先生、そして必要な品々を揃えるために奔走して下さった師匠のお母様にはお礼の言葉もみつからない。この日をご用意下さった皆様への感謝の気持ちと、同時に、形式的なものとはいいながらこれから受ける試験のことで頭がいっぱいだった。三月の美紗の会のお稽古に追われ、課題曲「白扇」をほとんどおさらいできていない。さらに長引く風邪で、声が全く出ない。急遽、お三味線で試験を受けさせていただくことになっていた。

いつになく緊張しつつ白金のお稽古場に到着すると、ドアの外にも笑い声が聞こえ、予想外になごやかな雰囲気に安堵する。白いネクタイで正装された本郷会長がいらしたせいか、控室となった五階は、さながら結婚式の親族の控室のようだった。自分の結婚式を経験したことがない私は、祝っていただく側の一人としてその場所に立っていることがとても嬉しかった。控室では、どの人も口が軽やかだ。冗談がでる、でる。川邊さんや大久保さんの冗談に、私も腹を抱えて笑っていた。「緊張」していたのだ。なにか言葉を口にしていないといられないほど、緊張していたのだと思う。

「試験」は名取り式と同じ、三階のお稽古場で行なわれた。階下で千寿文先生の手をたたく音がしたら、一人ずつ降りていくという段取りだ。「若い照沼さんからよ」と先輩たちがこの時とばかり背中を押す。「それはないよ…」、しかし後輩だから文句は言えない。

「はい！」と空元気のお返事をし降りていくと、「順番が違うわ、上の方からよ」と千寿文先生。再び階段を駆け上がり、それを伝えた時の先輩たちの顔はおかしくていまも忘れられない。

お三味線で試験を受けられた岡崎さん、お唄の大久保さん、川邊さんが次々と試験を終えて戻ってこられる。私の番だ。しずしずとお部屋に入ると、上座に敷かれた赤い毛氈の中央に布咏師匠、左手に立会人の本郷会長、右手に後見人の千寿文先生が座っていらした。いつもとお顔が違う、とても厳しいお顔に見える。

お三方に礼をし、「白扇」を弾く。これまで何度となく美紗の会で演奏させていただいてきたが、あの時のような経験は初めてだ。白い扇どころか、頭の中が真っ白け。何をどう弾いたのか思い出せない。「おめでとうございます、合格でございます」とにこやかにおっしゃる千寿文先生のお顔が今度は観音様に見えた。

その時はさすがに観察する余裕がなかったのだが、後で聞くと、弟子の誰よりも、布咏師匠が緊張されていたそうだ。不出来の弟子をもつ師匠の苦労は並大抵ではない。本当に申しわけない。「ああ修行が足りない」と申しあげれば名前をとりあげられてしまいそうだが、これから精進し、挽回していくことを、この場をお借りしてお誓いしたいと思う。

全員が晴れて試験に合格し、千寿文先生に次なる儀式の段取りをていねいに教えていただく。いよいよ名取り式だ。お免状や祝いの品などをいただくにもカタチがあり、それをするにあたっては、やはり日本人だから背筋がぴっとなる。気持ちのいい緊張だった。師匠そして先輩方とご一緒に、かための杯をかわした時は、胸に熱いものがこみあげていた。

めでたく全ての儀式がつつがなく（？）終了し、布咏師匠と、千寿文先生、本郷会長をお食事の席にお招きする時間だ。川邊さんが予約してくださった店へとプラチナ通りをゆっくり歩いていった。「いい日ですね」「本当にいい日ですね」。あの暖かな春のような日の午後は、今もくっきり、アルバムの一枚の写真のように私の心にある。

そして最後に、さらに幸せに包まれる素敵なものが用意されていた。「これは美紗の会のルネッサンスです」で始まる本郷会長のご挨拶だ。その内容は何度となく推敲されたものとすぐにわかるご立派なものだった。なんとありがたいことだろう。この会に所属させていただいていることを、あらためて誇らしく思った。同じ場所、同じ時間の緊張をご一緒に経験すると、連帯感のようなものが生まれる。先輩方とのこれまで以上の親近感も、その日の私を幸せにしていた。大事なご事情で小高さんがご欠席されたことが、とても残念だった。

名前をいただいた重さ、これからの責任を少しずつ実感するこの頃。仕事を抱えながら続けていくことは、相変わらず容易なことではない。しかし私が経験したこの春の大イベントをふりかえり、僭越ながら申しあげたい。このあたたかく素敵な経験を、一人でも多くの方に体験していっていただきたいと思う。

「江戸の聲」

川崎隆章

昔は芝居、邦楽、落語が（そして雑俳も）密接に繋がっていましたが、どうも戦後これらをバラバラに楽しむ風潮が当たり前のものとなってきたようです。もちろん格式の問題をおっしゃる方もいらっしゃるでしょうが、いずれも「芸能」の一郭であって、その中心には大衆がいるわけで、これを切り離すと面白みが随分減ってしまうはずなのです。

落語を観る方は案外邦楽に疎かったり、お芝居に通う方は案外落語はテープでしかお聴きになっていなかったりする。邦楽のお好きな方には落語やお芝居のお好きな方が多いのですが、なかなか両方とも、という方は少ないようです。

そういった方にちょっとオススメだったのが二月二十日金曜日・銀座七丁目ライオン六階のホールで行われた「江戸の聲」でした。当日は百人を超える皆様にご予約を頂き、さらに当日申し込みでお越しになった方も加え、客席はギュウギュウ詰めになりました。狭い想いをされた方には謹んでお詫び申し上げます。

「江戸の聲」…つまり、布咏師匠と噺家・春風亭勢朝師匠の二人会という企画は、ちょっとした偶然から誕生しました。

ここで先に、当日会場を大いに沸かせてくれた春風亭勢朝師匠のプロフィールをご紹介しておきましょう。

春風亭勢朝師匠は昭和三十七年群馬県伊勢崎市のお生まれ。六畳と四畳半の長屋住まいで、祖父母・両親・兄・姉、そして預かっていた従兄弟に囲まれ、賑やかな中で悠々と育てられました。昔ながらの長屋住まい、お母様は評判の芸者そして、育った時代がテレビ演芸の全盛期。まさに英才教育的な環境で自然とセンスは磨かれていったのでしょう。高校の時突然落語に目覚めて友人とテープを聞きまくっていたところ、お母様が「落語家に成るんだったら知り合いに頼んであげる」と言い出した。誰にでも出来るこっちゃない。斬くして学生服に身を包み、母に連れられて訪ねた先が関東で一番威勢のいい当時落語四天王の一人であった春風亭柳朝師。昭和五十四年の真夏の事でありました。

しかし柳朝師はその後、病のため早世。その後、兄弟子の春風亭小朝師匠のもとに移り平成八年に晴れて真打昇進。現在に至ります。積極的に高座を勤める傍ら、高田文夫氏に高く買われ「ラジオビバリー昼ズ（ニッポン放送）」などでも活躍しました。お聞き覚えのある方もいらっしゃる事でしょう。

今から遡ることン十年前。当時布咏師匠が出演していた伊香保さつき亭の「伝統芸能と京懐石の夕」にお客様としていらっしゃっていた群馬県の女社長さんが「これが私の倅なのよ。噺家になりたいって言ってしょうがないのヨ」と、連れていた紅顔の美少年（当時）を紹介しました。

布咏師匠は昨年、毎回美紗の会のおさらいで司会を引き受けてくださっているお馴染み加藤さんのお店で開かれた落語会に観客として行ったのですが、この時出演していた噺家さん…どうも見覚えがあるナと思って会ってみた所、実はアノ時の美少年であった。そしてその女社長さんこそ、東京の演芸界でも有名な勢朝師匠のお母様であったのでした。

そこから話がトントンと進み、まさに江戸開府四百年という節目の年に、伝統ある銀座ライオンで会を開くことができた、というわけです。

また、この日は、先頃目出度くお名取りとなられた紀咏さん、佳咏さんの初高座ともなりました。本当にお目出度い話が重なった、素晴らしい一期であったと思います。

さて、当日の事と相成ります。

この日の口明けは「並木駒形」なのですが、唄の二番をちょっと寄席を気取った感じの替え歌にして、客席は早々と満開の気分。

布咏「花の銀座のライオンで
　落語三味線調子よく
　浮いた浮いたで
　すごしゃんせ
　六階でお手が鳴るぅ
　…勢朝さぁーん」

勢朝「はぁーい」

勢朝師匠、高座の袖から愛嬌たっぷりに登場。六尺豊かな体躯にも関わらずこれだけ可愛らしい仕草が出来る方は世界には二人とおりますまい。

「沢山の拍手を親戚でもないのにありがとう御座います。只今拍手を下さったかただけの幸せを祈ってみたいと思います。噺家は『家元といっしょ』というだけでおびえるんですが、（落語立川流家元・立川談志師のこと）今日は嬉しゅうございますね。勢朝の人情噺…泣けますョ…情けなくて」と勢朝師。一座大爆笑であります。

この日は最初の数曲は布咏師匠と勢朝師匠の愉快な対談を挟みながらすすめられました。曲目は「春風がそよそよ」「吉三節分」「梅は咲いたか」と続きます。

「まぁ…よく弾きながら唄えますよネ。普通、どっちかですよ。歌舞伎だって…歌ってるか弾いてるかだけですからね」こんな事を言っても全然嫌みにならないのが勢朝師の綺麗な所。

この後ちょっと高座の模様替えがあって、その間しばらく勢朝師匠のひとり漫談。

続いて歌沢「玉川」。ここで照明をグッと落としました。「思い出さずに忘れずに」の一言が心に沁みる、江戸の夜の再現です。

現在は治安のこともあって、すっかり夜が明るくなってしまいました。「治安」といわれると返す言葉がないのですが、もしかしたら、昼間生まれた心の小さな闇を開放する場として宵の大きな闇があったのではないか、開放されなくなった闇が心の中で大きくなった結果が、昨今の治安の問題につながっているのではないか・・・などと、勝手に私見したくもなります。

「江戸の聲」はまだまだ続きます。

続いて紀咏さんの初高座で端唄「春雨」と相成りました。後で聞いたところ相当にアガッてらっしゃったようなのですが、唄にはちっともそんな様子がなく、独特の柔らかな声がホール全体に豊かに響き渡りました。

再び模様替え。勢朝師が「春雨」にちなんだ川柳を紹介。

「舟底をガリガリかじる春の鮫（柳昇）」

続いて曲調変わって新内小唄「夢の柳橋」。佳咏さんの上調子で新内独特の哀々切々とした味が一層加味されました。これもしっとりとした夜の闇があって活きる唄。

あぁ、できれば「宵闇特区」なんてものが出来ないでしょうか。柳橋のあたりにでも。

そして「籠つるべ」。騙し騙されるのが楽しみであった廓の世界で、つい信じてしまったために起きた悲劇、そして、切羽詰まって男心を弄んでしまった傾城の悲劇。ふたつの悲劇が曲の中に結ばれ、お客様の心を締め付けました。これぞまさに新内の本領。引き続き佳咏さんの上調子。

ここでお仲入り。

後半は春風亭勢朝師匠の落語「浜野矩随」を一席。江戸の名職人の元に生まれた二世の苦しみと生まれ変わりを描いた、ちょっと風変わりな出世噺。名人の後継として生まれてしまったわが子の苦しみを想う母の哀しみ。この噺の演じ方には、その人情話らしい所に力を入れる演じ方もあるのですが、この夜は勢朝師がその後にしみじみとした曲が続くことを思ん慮って、やや寓話風にほのぼのと、暖かく演じてくれました。

さて、照明はますます暗くなり、蝋燭灯りで上方唄をじっくりと楽しむ時間となりました。曲は「六歌仙」と「柳やなぎ」を切れ目なく演奏。

この夜は開場から最初半時間ほど、飲み放題の新鮮なビールとオードブルで軽く腹の虫を抑えていただき、小唄・端唄までは飲みつつ食べつつお聴きいただきました。オードブルは懐石と洋食の見事な折衷で、最初、あまりに美しく盛りつけられているので、皆さんじーっと眺めておられた程でした。私はこの時バタバタと準備をしておりましたので、指をくわえる暇もなかったのですが、最初、気取ってお酒ばかり召し上がっていたお客さまが、徐々に、惹かれるようにお皿に鉢にお箸を進めてゆくのを見ました。これぞ老舗の技。

中入り後からは食の手を一旦止めていただき、お酒だけちびちびと召し上がって頂きましたが、上方唄に入ると酒の手も止まり、皆、じっと真っ暗な会場にただ二つ灯る赤い蝋燭と、そこに浮かび上がる布咏師匠の世界に見入っている。何か大きなものに包まれたような心地でありました。聲、心、闇、味。今宵の企画は実にどれも捉えようのない大きなものばかり。すべてが最後の二曲でひとつの形をなし、お客様の心にグッと納まったかのようです。

こうして終演。

「さぁ、これからが本番ですよ！」と勢朝師匠。

じゃあ、今までの唄や落語がオマケだったのか？いや、そんなわけはありません。いや、仮にそうでもいいじゃないかとさえ思います。出演者もお客様も主催者も、すべてが満足した笑みを湛えているこの時にどれが主であったか、などという事を考えるのは勿体ない勿体ない。

その後、勢朝師匠は着物の上から割烹着をつけて、飄々と卓から卓へと巡ります。寄席の芸人さんの中には終演後の酒席を嫌う方もいらっしゃるのですが、勢朝師匠はその逆。「私はですね、人が楽しんでいないのをほっとけないんですよ」と勢朝師。そういえば布咏師匠も終演後の席を大事にされています。先日の「素処」のライブの時もそうでした。よく誰かがちょっと退屈そうなそぶりをしていると（本人はそんな気がなくても）ちょっと気を付けて何かしてくださいます。まさにこの心なのだと思います。

「人が楽しんでいないのをほっとけない」

自分も真似しよう、と思わず素直な心になりました。

やっぱり、情けって人の心を溶かすんですねぇ。

編集後記

春、桜満開の頃を過ぎ、新緑爽やかな季節になってまいりました。

皆様いかがお過しですか。

美紗の会も、二月には、五人の名取が誕生し、新しい季節を迎えようとしています。

三月の初ざらえでは、新名取を含め皆さん上達した芸を披露できたのでは・・・と思います。

新人三人も加わってとても楽しい会でした。

大久保